平成8年度 企画展図録

# 暮らしの中の薩摩焼

附編／国際ソロプチミスト指宿 寄贈資料一覧

指宿市考古博物館

**時遊館COCCOはしむれ企画展**

■指宿市・指宿市教育委員会　■国際ソロプチミスト指宿

＜表紙資料＞

## 褐釉山徳利

苗代川系　17世紀　（当館蔵）

器高 29.2cm, 口縁部 11.2cm, 胴部 24.0cm

胴部に貝目があります。薩摩焼は、17世紀初頭から、生活に密着した陶器が生産されました。

**Yamadokkuri, bottle with brown glaze,**
Naeshirogawa Style,17th century,
(JIYUKAN Collection).
Shell imprint on the body.
From the early part of 17th century,Satsuma ware kilns produced utilitarian pottery.

貝目跡
Shell imprint

# ご　挨　拶

豊かな実りと文化の季節である秋を迎え、ふるさと指宿もそのやさしい香りにつつまれてまいりました。

時遊館ＣＯＣＣＯはしむれも開館して半年が過ぎようとしておりますが、このたび、平成８年度秋季企画展として、「暮らしの中の薩摩焼展」を企画いたしました。

安土・桃山時代にはじまったとされる薩摩焼は、その独自の美しさを保ちつつ、南九州の各地でそれぞれの地域色豊かな個性をみせながら花開いていきました。その美しさは、広く海外にまで及び、1867年にフランスで開催された万国博覧会にも出品されたと記録されています。長い歴史のなかで培われた感性と技は、現代薩摩焼に受け継がれ今なお、日本陶芸文化を代表する焼き物の一つとして知られています。今回の企画展は、人々の暮らしの中に深くとけ込んでいた薩摩焼に焦点をあてながら、「薩摩の美」をすくいとってみたい、そんな思いから展示を構成いたしました。

－暮らしの中にある歴史と芸術のみごとな融合－、それの一つの形が薩摩焼となって結実したのではないでしょうか。この企画展が、国際化が叫ばれる昨今の中で、今一度、日本の、そして鹿児島の文化を見つめなおすきっかけになれば幸甚でございます。

今回の企画にあたりましては、国際ソロプチミスト指宿の皆様よりご寄贈賜わりました薩摩焼253点の中から83点を厳選しご紹介しております。貴重な資料の出品にご尽力いただきました国際ソロプチミスト指宿の皆様、並びにご協力賜わりました関係各位に厚く御礼申し上げます。

指宿市長　田原迫　要

---

# 企画展によせて

今から約１万２千年前、はじめて土器が発明されました。縄文時代の幕開けです。実用から始まった土器は、やがて美しい縄文土器を次々と生み出し日本原始美術の原点となりました。

以後、数千年の歴史の中で、大陸から新しい技術や文化が伝えられ、日本独自の伝統が育まれ、醸成されていきました。この１万年以上の歴史を持つ「器」の中から薩摩焼も生み出されました。

17世紀のはじめ、韓半島から渡来した工人たちによって、その窯が開かれたといわれていますが、薩摩焼きのルーツは、謎に満ちています。しかしながら、薩摩焼は、江戸時代以降、豪華絢爛に彩られる白薩摩に代表されるように日本美術の先端を走りながら、その一方で、急速に、そして深く一般の民衆の生活に浸透していきます。日々の暮らしの中でひっそりと、そして大切に伝えられて来た薩摩焼の伝統は、今なお、折々の暮らしの場面に欠かせない鹿児島の顔となっています。今回の企画展では、生活の中にある「薩摩焼」の美しさと力づよさをご紹介すると同時に、その伝統と系統について触れ、ふるさと鹿児島の歴史を振り返ってみたいと思います。

開催にあたり、薩摩焼をご寄贈賜わりました国際ソロプチミスト指宿の皆様、そしてご指導・ご協力いただきました関係各位に対しまして、深く感謝申し上げ、ごあいさつにかえさせていただきます。

指宿市考古博物館
時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ
館　　長

# ご　挨　拶

自然豊かな湯豊宿の里に、長年に亙る橋牟礼川遺跡の地道な発掘が続けられています。そして、この遺跡は私達を古代への想いに誘います。

この地に、考古博物館“時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ”の完成を見ましたことは、誠に嬉しいことでございます。

開館を記念いたしまして、国際ソロプチミスト指宿会員による薩摩焼コレクションの寄贈を申し出ましたところ、今般、指宿市・指宿市教育委員会と共催での特別企画展示の形をとりまして皆様にご披露いたす運びとなりました。

私共の先祖が培ってまいりました用の中の美を遺憾なく発揮して輝いているこれらの作品をソロプチミストコレクションとして、これらが使われていた土地に保存していただき、私達の誇る郷土の資料として多くの方々にご高覧、ご活用いただけませば至福の極みでございます。

尚、国際ソロプチミスト指宿の認証10周年記念事業の一環といたしましての展示品図録、および寄贈品目録の出版に当たりましては、博物館学芸員の方々を中心に、本コレクションの整理、研究に惜しみない労力を注ぎ、これらの資料に学術的な価値を加えてくださいました。

そして、指宿市・指宿市教育委員会の全面的なご尽力と、多大なご協力を賜りました関係各位に対し、ここに深甚の感謝を申し述べます。

国際ソロプチミスト指宿
会長　村　田　雪　枝

## CONTENTS


・薩摩焼のはじまり（さつまやき）……1
The Origin of Satsuma Ware

・薩摩焼の隆盛と多様性（さつまやき　りゅうせい　たようせい）……7
Satsuma Ware, Its Prosperity and Its Diversity

・暮らしの中の薩摩焼（く　なか　さつまやき）……19
Satsuma Ware in Everyday Life

・附編　国際ソロプチミスト指宿寄贈資料一覧……27
Appendix: List of Soroptimist Donation

さつまやき

# 薩摩焼のはじまり

１７世紀

**The Origin of Satsuma Ware**

(17th century)

## １．そば釉四耳壷（貝目）

苗代川系　17世紀　（当館蔵）

器高 18.7cm, 口縁部 11.1cm, 胴部 20.8cm

**Four-lobed jar with greenish-gray glaze,**
**(shell imprint),**
Naeshirogawa Style,17th century,
(JIYUKAN Collection)

## ■ 貝目のある器

貝目とは、焼物を窯で焼く時に、焼物同士や焼物と窯がくっつかないようにその間にハイガイなどの２枚貝をはさむもので、その時、貝の跡が器につきます。これを貝目といいますが、貝を窯道具に使う伝統は、17世紀の陶工たちが韓国の技術の伝統をそのまま継承したからであると考えられています。18世紀になると貝目のついた器は姿を消すといわれています。(1)

**Vessels with shell imprint**

Shell patterns are imprinted when calm shells are placed as pads to keep objects from sticking together or onto the kiln bed at the time of firing.

The technique of using shells as a kiln tool is said to have been inherited from Korean potters in the 17th century.

The practice is said to have disappeared in the 18th century.

豊臣秀吉による現在の韓国への侵略戦争（文禄・慶長の役）は、悲しい歴史として、わたしたちの心に刻まれています。
その当時の戦国武将の間の茶の湯の隆盛に呼応し、先んじて発達していた韓国の陶工たちが薩摩にも連れてこられました。
それが薩摩焼の始まりです。
しかし、その後、薩摩焼は、鹿児島の風土と陶工たちの努力で、独特の焼物として発展してきました。
いわば、韓国と鹿児島の歴史の結晶ということができます。

Unfortunate as Toyotomi Hideyoshi's invasion of Korea (Wars of Bunroku and Keicho) was as judged by history, it led to great benefit for the cult of the tea ceremony then at its zenith of prosperous popularity and desire to aquire fine and unique pottery long coveted by powerful feudal lords.
It was at this time when Korean potters were brought to Satsuma to establish their kilns which eventually led to the origin of Satsuma ware.
Under the protection and patronage of succeeding Satsuma lords, their pottery form has thrived and continued to this day to mark a gem of success between the two great cultures of Korea and Satsuma.

白薩摩火計手蓮葉文茶碗

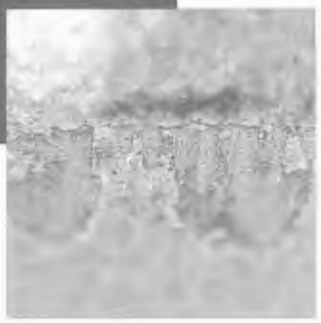
17世紀（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）

韓国から移入された素材・技術を色濃く用い、器を焼く火だけを鹿児島のものを使ったということから「火ばかり」といわれたという説があります。

**Tea Bowl with Lotus-leaf form, White Satsuma (hibakari-de),**
17th century (Kagoshima Prefectual Museum of Culture REIMEIKAN Collection).
Hibakari, or fire alone, so named as both the technique and clay imported from Korea, was fired in Satsuma.

17世紀初頭に薩摩焼の３つの大きな流れが形成されました。(2)
朴平意らにより苗代川系（串木野窯）、金海により竪野系（帖佐宇都窯）、そして芳仲らにより龍門司系（龍口坂窯）が開かれました。

In the eary 17th century, three main forms of Satsuma ware were established.
Boku Heii and others founded Naeshirogawa Style (Kushikino kiln), Kinkai founded Tateno Style (Chosa Uto kiln), and Hoh-chu and others founded Ryumonji kiln(Tatsukuchizaka kiln).



## ２．そば釉山徳利（貝目）

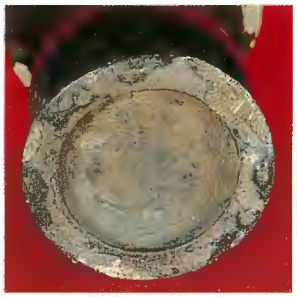
苗代川系　17世紀　（当館蔵）

器高 27.6cm, 口縁部 8.4cm, 胴部 21.2cm

**Yama-dokkuri, bottle with greenish-gray glaze (shell imprint)**, Naeshirogawa Style,17th century. (JIYUKAN Collection)

この徳利は、苗代川で作られたお酒などの液体を入れる器です。貝目の跡がはっきりとわかります。17世紀後半のものと考えられますが、薩摩焼は、お茶の道具を作るばかりではなく、そのはじめの頃から生活に密着した器も多く作られていたことが大きな特徴です。これらのいわゆる「黒もの」は、茶陶の影響もあり、素朴ながらも奥深い世界を形成していきます。

Liquor container with shell imprint is from the latter 17th century. Black Satsuma ware has produced many diverse utilitarian wares as well as tea ceremony utensils, influenced by the simple elegance in the tea ceremony, of which Black Satsuma is highly appreciated.



尊形花瓶と呼ばれるこの器は、中国の磁器の「尊」という器を韓国で模倣した伝統に基づいて作られたものです。(3)
獅子の形をした耳がついています。

So-called Son-shape vase with lobes of lion face was modeled after its Chinese prototype, Son being the shape of two palms supporting an object upward.

## 3．黒釉双耳尊形花瓶（貝目）

苗代川系　17世紀　（当館蔵）

器高 27.3cm, 口縁部 21.3cm, 胴部 13.6cm

**Vase with two lobes, Son shape, with black glaze (shell imprint)**, Naeshirogawa Style, 17th century.
(JIYUKAN Collection)

この筒型花瓶は、17世紀後半のものと考えられます。茶の世界において、このような花瓶が使われていたと考えられています。

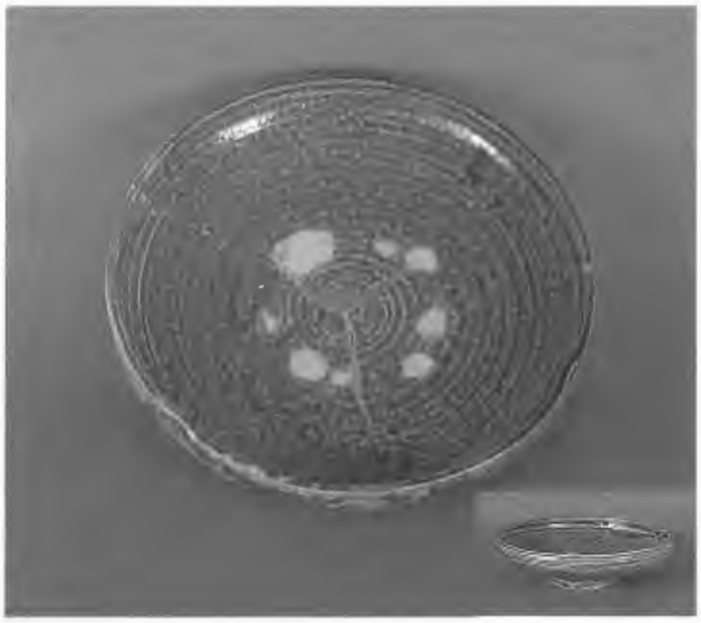
Cylindrical flower vase with brown glaze assumed to be of the latter 17th century, is said to have won a great favor of tea masters.

## 4．そば釉筒形花瓶（貝目）

苗代川系　17世紀　（当館蔵）

器高 21.4cm, 口縁部 10.4cm

**Cylindrical vase with greenish-gray glaze, (shell imprint),**
Naeshirogawa Style, 17th century.
(JIYUKAN Collection)



5．飴釉丸形輪花中皿

山元窯　17世紀後半　（加治木町教育委員会蔵）

**Round dish with floral design, light brown graze,**

Yamamoto kiln, latter 17th century,

(Kajiki Town Board of Education Collection)

山元窯は、龍門司系の窯で、西暦1677年に何芳珍の孫、碗右衛門が開いたものと考えられている窯です。平成４年に発掘調査が行なわれました。

特に、島津忠朗の庇護のもと碗・皿・すり鉢等が生産されました。

この窯の製品は半磁器と呼ばれ、当初、磁器生産を目指していたものと考えられています。(4)

**Yamamoto kiln** is one of the oldest kilns of Ryumonji Style, assumed to have been founded in 1677 by Wanuemon, grandson of Ka Hochin. Excavation in 1992 revieled that the kiln, under the patronage of Shimazu Tadaaki, produced bowls, plates and mortars.

The products of the kiln are called porcelaineous stoneware, which proved that the kiln was striving to produce porcelain wares.

6．平成４年11月～12月の発掘調査で全容を現わした山元窯

**Whole view of Yamamoto kiln remains,**

at the time of excavation from November to December,1994.

窯の構造は、昭和９年に東洋陶磁研究所の小山富士夫・田沢金吾氏らによる発掘調査で肥前系の窯で、いくつかの部屋に仕切られた登窯であることが推定され、(5) 平成４年の発掘調査では、７部屋の焼成室を持つ階段式登窯であることが確認されました。(6)

The excavation conducted by Fujio Koyama and Kingo Tazawa in 1934 confirmed that the kiln construction belonged to the Hizen Style of terraced climbing kiln consisting of 7 chambers.

## ■ 17世紀の薩摩焼の流れ(7)

17世紀の薩摩焼の流れを概観すると、島津家の管理下にあった窯は、その嗜好を色濃く反映したものが多く、一般の量産流通を目的とした窯経営でないことが特徴です。それは、窯構造にも反映され、肥前系の大量生産を目的とした窯の登場はやや遅れて18世紀以降に普及します。
しかし、日常雑器も一方で少しずつ生産され、薩摩焼の初期の段階から、日常雑器と献上品、黒と白、ケとハレという二元的な薩摩焼の世界が構成されていたといえます。

### ＜苗代川系＞

1599年（慶長4年）に朴平意は、串木野に窯を開き、1603年には、現在の苗代川に移住し、元屋敷窯、堂平窯などの初期の苗代川の窯を開きました。初期の苗代川の窯道具では二枚貝を使い、その跡が器につくものがあります。これを貝目といいますが、韓国の技術が踏襲されているもので、17世紀の苗代川系の特徴であるということもできます。
1623年（元和9年）に、朴平意の長男、貞用は、指宿で白土（カオリン）を発見し、以降「白薩摩」が登場しました。

### ＜龍門司系＞

1608年（慶長13年）に芳仲らは、加治木に龍口坂窯、吉原窯を開いたとも言われています。その後、1667年（寛文7年）に、加治木島津家の庇護を受けて、山元窯が開かれました。平成4年に加治木町教育委員会で発掘調査が行なわれ、碗・皿を中心に植木鉢、すり鉢などの日常雑器も発見されています。

### ＜竪野系＞

1601年（慶長6年）に金海は、姶良町に宇都窯を開き、1608年には、瀬戸古窯を模した御里窯で、茶陶を中心とした器が作られました。
1620年（元和6年）に、金海は、現在の鹿児島市に冷水窯を開きました。その後、肥前式登窯を模し、この窯の頃から、京焼（京の御室窯）の絵付けの影響や当時茶人の評価の高かったタイのスワンカローク窯の模倣（宋胡録写）などが登場し、多様な薩摩焼の特徴を形成していったと考えられます。

**Satsuma Ware in the 17th century**

Characteristics of the 17th century Satsuma wares certainly reflects aesthetic tastes as desired by the Satsuma lords for their exclusive use, a fact supported by the construction of the kilns for their production.
Hizen style kilns built for quantity appear later from the 18th century on.
From its inception, Satsuma ware has exhibited an extraordinary duality of stylization contrusts: utilitalian vs. ornamental, casual vs. formal, black vs. white.

**<Naeshirogawa style>**

In 1599 Boku Heii established a kiln in Kushikino, Later moving to Naeshirogawa in 1603 where he founded the Motoyashiki and Doubira kilns both being the oldest kilns for this style.The technique of *kaime* or shell imprint, an early Naeshirogawa innovation, is said to have been adopted from the Korean tradition of using shells as kiln tools.
Another study shows that kaolin found in Ibusuki in 1623 by Boku Heii led to the rise of White Satsuma.

**<Ryumonji style>**

In 1608 Hoh Chuu and others founded the Tatsunokuchizaka and Yoshiwara kilns in Kajiki. In 1667 the Yamamoto kiln was founded under the patronage of the Shimazu clan of Kajiki.The excvation conducted by the Kajiki Town Board of Education in 1994 revealed evidence of the production of daily utensils such as bowls, dishes and mortars.

**<Tateno style>**

In 1601 Kinkai founded the Uto kiln in Kajiki. In 1607 the Osato kiln, modeled after old kilns in Seto, began its production of tea utensils. Later by 1620 Kinkai founded the Hiyamizu kiln modeled after the Hizen style of the multi-chambered climbing kiln(*noborigama*).
Greatly influenced by Kyoto porcelain aethetic values of the tea ceremony, it was during this period that many diverse styles of Satsuma wares were developed including the Sawankhalock style of Thailand.

# 薩摩焼の隆盛と多様性
１８～１９世紀

**Satsuma Ware, its Prosperity and its Diversity**
(From the 18th to 19th centuries)

7．そば釉四耳大壷（貝目）
苗代川系　19世紀　（当館蔵）
器高 60.3cm, 口縁部 19.7cm, 胴部 42.4cm

**Four-lobed Large Jar with greenish-gray glaze,**
Naeshirogawa Style, 19th Century.(JIYUKAN Collection)

## ■ 薩摩焼の多様性

黒薩摩とは、一般に供給されたまさに暮らしと密着した器です。
一方、白薩摩は、薩摩藩の直営により、研究が重ねられ、色絵のものなどさらに多様性を増し一般の手にわたるものではなかったのです。
しかし、この二つの薩摩焼は、どちらも、薩摩焼の本来の姿なのです。

Black Satsuma is represented by those wares widely used by commoners for their everyday use, whereas White Satsuma represents those wares flourishing under the patronage of succeeding Satsuma clan lords desiring highly elaborate techniques with great aesthetic expression and whose costs were far beyond the reach of average people. These two types comprise the mainstream of Satsuma ware.

## ■ 18,19世紀の薩摩焼の流れ[8]

17世紀前半、指宿におけるカオリンの発見は、「白薩摩」の生産を可能にした重要な発見でしたが、それ以降、日常雑器の「黒薩摩」とみやびを主とした「白薩摩」との峻別がはっきりと行なわれるようになり、18～19世紀の薩摩焼の量産期に入ると、白・黒の特徴はより明確になり、特に白ものの色絵ものの製作については、藩の許可制となりました。

### ＜苗代川系＞

1748年（寛延元年）、御物窯が開かれ、1764年に御定式窯と改称されました。この窯は、藩営の窯で、一般への普及対象ではありませんでした。白薩摩太白・呉須絵・宋胡録写・象嵌三島手・鉄絵などの多彩な器が作られました。そして、19世紀には、南京皿山窯が開かれ、天草の陶石を移入し、染付・白磁の生産が行なわれ、磁器の生産が本格化しました。
一方、これと並行して、東・西打通窯が開かれ、半胴・甕・壷などの日常雑器が中心に製作され、広く一般の需要に答えたのです。

### ＜種子島系＞

西之表住吉に18世紀に開かれた一般向けの製品を焼いた能野窯などが名高いのですが、不明な点が多い窯でもあります。無釉の焼締による作風が知られ、塩釉も19世紀半ばに加えられます。野間窯は、1794年（寛政6年）に苗代川陶工の招聘により成立した窯で、窯印を押したものが多く、苗代川の作風を踏襲しています。
種子島系の両窯とも、薩摩・琉球向けの民需に支えられていたと考えられます。特に、琉球の需要を意識した製品も多く、その流通についての研究が待たれます。[9]

### ＜龍門司系＞

龍門司窯は、1688年（元禄元年）に開窯しましたが、1717年（享保2年）に場所を移して窯を開きました。白化粧、飛鉋、三島手、鮫肌、蛇蝎手などの特徴ある作品を生産し、日常雑器を焼く共同窯として成立していました。その後半期には、芳工、芳寿・芳平、芳右、芳石、芳林、芳光、芳次と、「芳」号の名工が輩出し、唐津二彩や肥前陶磁器などの影響を受けました。

### ＜竪野系＞

1763年（宝暦13年）に星山弥兵衛金当らは、冷水窯から分かれて長田窯を開きました。特に、18世紀末に、色絵を京の粟田焼に習い、薩摩錦手を完成に導いていきました。

### ＜平佐系＞

1776年（安永5年）、川内平佐の今井儀左衛門は有田の陶工を招聘し出水に脇本窯を開きましたが、まもなく廃窯し、続いて1786年（天明6年）に伊知地団右ェ門が平佐皿山に窯を開きました。また、19世紀になると、平佐大窯が開かれ、白磁・青磁・呉須染付等を中心に、天草からの陶石を移入して磁器の大量生産を行いました。

**Satsuma Ware in the 18th and 19th centuries**

The discovery of Kaolin in the Ibusuki area in the early 17th century led to the production of White Satsuma.Therealter Black Satsuma devoted its production to everyday utensils and the White to the more sophisticated and elaborate objects. In these centuries Satsuma ware was produced in greater quantities and the distinction between the Black and the White became even more evident when the White wares, especially that of *Iroe*, or polychrome enamel, became monopolized by the feudal lords.

**<Naeshirogawa Style>**

In 1748 the Omono kiln was founded and later renamed the Gojyooshiki kiln in 1764.
It was operated by the feudal lord of Satsuma and yielded diverse high quality products among them White porcelainous stoneware, underglaze blue and white, underglaze iron brown, Sawankhalock style, Mishimade inlay work and others.

In the 19th century the Nankin-sarayama kiln was founded which started producing porcelain wares in Naeshirogawa with clay imported from Amakusa. In contrast, East and West Uttoushi kilns produced various types of utilitarian wares such as storage jars and liquor containers.

**<Tanegashima Style>**

The products of the Yokino kiln founded at Nishinoomote on Tanegashima in the 18th century are typical of the non-glazed or slightly glazed highly-fired pottery of the region but much of its history remains unknown. The mid-19th century products include pottery with so-called salt glaze unique to Yokino.

Naeshirogawa potters were invited to establish the Noma kiln on the island and whose products inheriting their style are distinguished by the incised kiln marks.

Both kilns were intended to cater to both Satsuma and Ryukyu areas but their market distribution awaits further study.

**<Ryumonji Style>**

The Ryumonji kiln was established in 1688 and later relocated in 1717. Many varied techniques used in these communal kilns include slip wash glazing, *tobikanna* chattering, inlay work(*mishima-de*), *same-hada*, and brown serpent skin(*dakatsu-de*).

In the latter part of the century, noted potters names such as Hoh-koh, Hoh-jyu, Hoh-hei, Hoh-yu, Hoh-seki, Hoh-rin, Hoh-ko, Hoh-ji can be seen stamped into their works.

These artisans inherited the Hizen ceramic tradition and the Karatsu glazing technique.

**<Tateno Style>**

In 1763, the Nagata kiln, a branch of the Hiyamizu kiln, was established by Hoshiyama YahyoKinto who studied Awata ware of Kyoto. It was he who carried Satsuma Nishikide(polychrome enamel with gold) to its perfection by the end of the 18 th century.

**<Hirasa Style>**

In 1776 Imai Gizaemon invited potters from Arita and founded the Wakimoto kiln in Izumi which was closed soon after, however another kiln was opened in 1786 at Hirasa-sarayama by Ichiji Danuemon . In the 19th century the Hirasa-oogama kiln started production of porcelain, celadon, and underglaze blue and white ware by importing clay from Amakusa.

そめつけさんすいずりんかざら
染付山水図輪花皿
ひぜんけい　せいき
肥前系　18～19世紀　（当館蔵）
器高 20.5cm，口縁部 4.0cm

**Dish with landscape and flowers, with underglaze blue,**
Hizen Style, 18th to 19th Century.
(JIYUKAN Collection)

## 【苗代川系】
**Naeshirogawa Style**

### 8．そば釉山徳利
苗代川系　18～19世紀　（当館蔵）

器高 29.2cm，口縁部 11.2cm，胴部 24.0cm

**Yama-dokkuri, bottle with greenish-gray glaze**

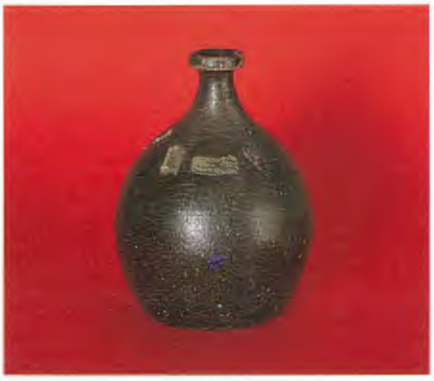
Naeshirogawa Style, 17th century.(JIYUKAN Collection)

### 9．黒釉大からから
苗代川系　19～20世紀　（当館蔵）

器高 18.3cm，口縁部 5.5cm

**Karakara, large sake server with black glaze,**

Naeshirogawa Style, 19th to 20th century.(JIYUKAN Collection)



### 10．褐釉徳利
苗代川系　17～18世紀　（当館蔵）

器高 23.1cm，口縁部 4.7cm，胴部 17.4cm

**Tokkuri, bottle with brown glaze,**

NaeshirogawaStyle, 17th to 18th century. (JIYUKAN Collection)

### 11．黒釉雲助徳利
苗代川系　18～19世紀　（当館蔵）

器高 24.4cm，口縁部 8.0cm，胴部 19.2cm

**Unsuke-dokkuri, bottle with spout with black glaze,** Naeshirogawa Style,18th to 19th century.(JIYUKAN Collection)

### 12．褐釉尿瓶
苗代川系　19～20世紀　（当館蔵）

器高 18.6cm，口縁部 4.8cm，胴部 19.2cm

**Chamber pot with brown glaze,**

Naeshirogawa Style, 19th to 20th century. (JIYUKAN Collection)

## 【種子島系】

**Tanegashima Style**

種子島の陶器生産は、能野窯と野間窯に別けられ、能野窯は、18世紀代、19世紀前半、19世紀後半と３つの時期に別けられるといわれています。(10) そのうち、18世紀代のものは、無釉の焼締や褐釉等の琉球壷屋風の作風が主流です。19世紀前半では、塩釉や素朴ではありますが苗代川系の作風も加わり、九州本土需要への意識も行なわれるようになります。
そして、19世紀後半では、肥前式登窯の導入に伴い塩釉の作品は姿を消したと考えられています。もうひとつの種子島の野間窯は、当初から、苗代川系の技術を踏襲していたものであり、黒釉・そば釉などが用いられました。

Pottery of Tanegashima Island came from the two kilns of Yokino and Noma. Yokino wares can be categolized into three stages, namely 18th century, early 19th century, and late 19th century.18th century wares are highly-fired, non-glaze or brown glaze, resembling Tsuboya kiln style of Ryukyu.In the early 19th century, a unique salt glaze and Naeshirogawa techniques were added to produce simple pottery, catring to the Kyushu mainland demand. With the introduction of the Hizen style multi-chambered climbing kiln, salt glazed wares, it is assumed, disappeared. Meanwhile, Noma kiln continued Naeshirogawa technique to produce pottery with black and greenish-gray glaze.

13．塩釉壷
能野窯　19世紀　（当館蔵）
器高 25.7cm, 口縁部 12.8cm, 胴部 21.9cm

**Jar with salt glaze,**
Yokino kiln, 19th to 18th century.
(JIYUKAN Collection)

14．褐釉花瓶
野間窯　19世紀　（当館蔵）
器高 15.3cm, 口縁部 8.6cm, 胴部 9.7cm

**Vase , with brown glaze, with kiln mark on the body,** Noma kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

## 【高尾野系】

**Takaono Style**

高尾野窯は、西暦1740年（元文5年）に、苗代川の陶工の朱南伝が高尾野壷屋迫に窯を開き、寛政初期には、廃窯したといわれています。
また、明治30年に苗代川の陶工、朴洋宅らが10年程操業しました。
高尾野窯の特徴として、雲助徳利などは、堂平窯（17世紀）に見られる巻合わせ口が明治まで存続して、特徴となっています。また、格子目の叩き技法が踏襲されている点も大きな特徴となっています。(11)

The Takaono kiln was founded by the Naeshirogawa potters, Shu Nanden and others, but ended early in Kansei Period, however records indicate that another Naeshirogawa potter, Boku Yohtaku engaged in production in 1898s.
The embrased form of spout seen on liquor containers characterizes the Doubira kiln of the 17th century and continued till the Meiji era. Grilled patterns of batting with paddle technique(*tataki*) is another traditional feature of Takaono wares.

15．褐釉雲助徳利
高尾野窯　18世紀　（当館蔵）
器高 20.3cm, 口縁部 7.1cm, 胴部 19.1cm
**Unsuke-dokkuri, bottle with spout, with brown glaze,**
Takaono kiln, 18th century.(JIYUKAN Collection)

16．褐釉壷
高尾野窯　20世紀　（当館蔵）
器高 24.9cm, 口縁部 15.8cm, 胴部 22.8
**Jar with brown glaze,**
Takaono kiln, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

17．褐釉徳利
高尾野窯　18世紀　（当館蔵）
器高 24.5cm, 口縁部 6.7cm, 胴部 19.7cm
**Tokkuri, bottle with brown glaze,**
Takaono kiln, 18th century.
(JIYUKAN Collection)

## 【平佐系】

**Hirasa Style**

平佐系は、当初より、肥前磁器の影響下で成立した窯で、西暦1776年（安永5年）に出水脇本で肥前有田の陶工を招聘して、開窯しました。18世紀には、概ね、北郷窯が磁器を生産を開始して、19世紀には、平佐大窯が開窯しました。染付、白磁、赤絵などが見られます。また、19世紀後半には、平佐新窯も開かれました。(12)

The Hirasa kilns, founded in 1776 by potters invited from Arita, Hizen province, produced wares strongly influenced by Hizen ceramics. In the 18 th century, production of porcelain began at Hongoh kiln turning out diverse wares of underglaze blue and white, white porcelain, overglaze enamelwork and such. The 19th century saw the rise of the Hirasa-oogama and Hirasa shingama kilns.

18．染付草花文角からから
北郷窯　19世紀　（当館蔵）
器高 11.8cm, 口縁部 3.1cm, 胴部 10.3cm

**Karakara sake server, with floral design, with underglaze blue,**
Hongoh kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

19．染付草花文角からから
北郷窯　19世紀　（当館蔵）
器高 12.2cm, 口縁部 3.2cm, 胴部 10.6cm

**Karakara sake server, with floral design with underglaze blue,**
Hongoh kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

20．染付菊文徳利
平佐系　19世紀　（当館蔵）
器高 24.8cm, 胴部 17.5cm

**Tokkuri, bottle with chrysanthemum design, with underglaze blue,**
Hirasa Style, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

21．染付笹文徳利
波佐見系　19世紀
（当館蔵）
器高 21.3cm, 口縁部 3.3cm, 胴部 12.6cm

**Tokkuri, bottle with bomboo-leaf design, underglaze blue,**
Hasami Style, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

22．染付洋字文醤油瓶
波佐見系　19世紀前半
（当館蔵）
器高 17.7cm, 口縁部 3.0cm, 胴部 10.3cm

**Soy sauce bottle for export use, with inscription(JAPANSCHZOYA)**
Hasami Style, Early 19th century.
(JIYUKAN Collection)

## 【龍門司系】

**Ryumonji Style**

### 龍門司窯

**Ryumonji kiln**

23．黒釉花瓶　在銘「龍門司芳林」
龍門司窯　19世紀　（当館蔵）
器高 14.7cm, 口縁部 8.1cm, 胴部 7.3cm

**Vase with black glaze, signed "Ryumonji Ho-rin",**
Ryumonji kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

24．白化粧青流からから
在銘「龍門司芳林」
龍門司窯　19 世紀　（当館蔵）
器高 13.3cm, 口縁部 5.1cm, 胴部 10.3cm

**Karakara sake server, with blue glaze over yellow, signed "Ryumonji Ho-rin",**
Ryumonji kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

25．透明釉白流からから
在銘「芳石」
龍門司窯　19世紀　（当館蔵）
器高 14.2cm, 口縁部 4.7cm, 胴部 9.8cm

**Karakara sake server, with flow of white glaze over brown, signed "Ho-seki",**
Ryumonji kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

26．白化粧鉄絵笹文からから
在銘「芳光」
苗代川系　19世紀　（当館蔵）

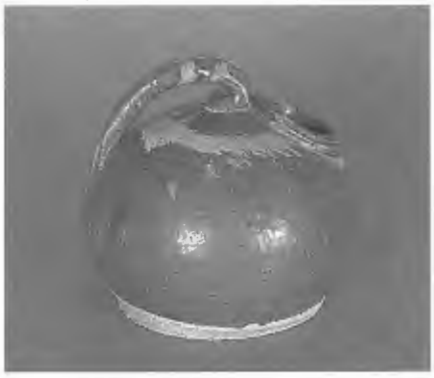
器高18.3cm，口縁部5.5cm

**Karakara sake server, with bomboo-leaf decoration, with underglaze iron,signed "Ho-koh",**
Ryumonji kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)

27．三彩釉からから
在銘「芳光」
龍門司窯　19世紀　（当館蔵）

器高13.5cm，口縁部4.3cm，胴部9.9cm

**Karakara sake server, signed "Ho-koh",**
Ryumonji kiln, 19th century.
(JIYUKAN Collection)



28．褐釉玉流尿瓶
龍門司窯　19～20世紀　（当館蔵）

器高17.0cm，口縁部6.4cm，胴部17.5cm

**Chamber pot, with opaque white glaze over brown,**
Ryumonji kiln, 19th to 20th century.
(JIYUKAN Collection)

29．褐釉白流尿瓶
龍門司窯　19～20世紀　（当館蔵）

器高15.0cm，口縁部5.7cm，胴部16.7cm

**Chamber pot, with white glaze over brown,**
Ryumonji kiln, 19th to 20th century.
(JIYUKAN Collection)

30．白化粧油壷
龍門司窯　19～20世紀　（当館蔵）

器高10.7cm，口縁部2.4cm，胴部8.1cm

**Hair-oil pot, with white wash,**
Ryumonji kiln, 19th to 20th century.
(JIYUKAN Collection)

## 【元立院系】

**Genryuin Style**

### 元立院窯（西餅田窯）

**Genryuin kiln (Nishimochida kiln)**

### 31．褐釉双耳仏花器

元立院窯　17世紀後半～18世紀前半

（当館蔵）

器高13.6cm，口縁部6.0cm，胴部9.3cm

**Vase for Buddhist altar, with two lobes, with brown glaze,**

Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.

(JIYUKAN Collection)

### 32．黒釉花瓶

元立院窯　18世紀後半～19世紀前半

（当館蔵）

器高14.7cm，口縁部8.1cm，胴部7.3cm

**Vase with black glaze,**

Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.

(JIYUKAN Collection)

### 33．褐釉双耳仏花器

元立院窯　17世紀後半～18世紀前半

（当館蔵）

器高9.6cm，口縁部4.4cm，胴部4.9cm

**Vase for Buddhist altar, with two lobes, with brown glaze,**

Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.

(JIYUKAN Collection)

### 34．褐釉双耳仏花器

元立院窯　17世紀後半～18世紀前半

（当館蔵）

器高9.5cm，口縁部4.5cm

**Vase for Buddhist altar, with two lobes, with brown glaze,**

Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.

(JIYUKAN Collection)

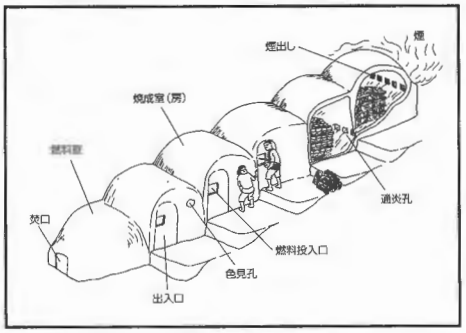
# 平成４年の元立院古窯付近の発掘調査で出土した資料

**Unearthed pieces at the Genryuin old kiln sites**
**Excavation conducted in 1992**

35．木灰釉花瓶
元立院窯　17世紀後半～18世紀前半
（姶良町教育委員会蔵）
**Vase for Buddhist altar, with natural ash glaze,**
Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.
(Aira Town Board of Education Collection)

36．木灰釉花瓶
元立院窯　17世紀後半～18世紀前半
（姶良町教育委員会蔵）
**Vase for Buddhist altar, with natural ash glaze,**
Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.
(Aira Town Board of Education Collection)

37．窯積状況
元立院窯　17世紀後半～18世紀前半
（姶良町教育委員会蔵）
**Pottery pieces fused together during firing,**
Genryuin kiln, Latter 17th to early18th century.
(Aira Town Board of Education Collection)




38．窯詰めの状況 (13)
**Pottery being loaded for firing**

39．トチン（窯道具）
元立院窯
17世紀後半～18世紀前半
（姶良町教育委員会蔵）
**Tochin(kiln tool),**
Genryuin kiln, latter 17th to early 18th century.
(Aira Town Board of Education Collection)

## 【竪野系】

**Tateno Style**

40．白薩摩太白徳利

竪野系　18世紀　（当館蔵）

器高 23.5cm，口縁部 6.4cm，胴部 16.3cm

**Tokkuri, White Satsuma bottle porcelaineous,**

Tateno Style, 18th century.

(JIYUKAN Collection)

41．白薩摩太白土瓶

竪野系　19世紀　（当館蔵）

器高 18.8cm，口縁部 6.0cm，胴部 11.4cm

**Tea pot, White Satsuma porcelaineous,**

Tateno Style, 18th to 19th century.

(JIYUKAN Collection)

42．宋胡録写双耳花瓶[14]

苗代川系　18～19世紀　（当館蔵）

器高 27.5cm，胴部 18.5cm

**Vase, Sawankhalock Type,**

Naeshirogawa Style, 18th to 19th century.

(JIYUKAN Collection)

# 暮らしの中の薩摩焼

２０世紀

**Satsuma Ware in Everyday Life**

(The 20th century)

## 43．染付菊文花瓶

苗代川系　20世紀前半　（当館蔵）

器高18.2cm，口縁部10.2cm

**Vase with chrysanthemum decoration, underglaze blue,**

Hirasa Style, early 20th century.(JIYUKAN Collection)

## ■ 薩摩焼の多様性

薩摩焼の歴史の上で、19世紀後半は廃藩置県とともに薩摩藩の保護がなくなり、陶工や上絵師は、それぞれの道を模索した時期であったということができます。しかし、完成度を高めていた白ものは、ヨーロッパの市場の需要もあり、日常雑器であった黒ものは変わることなく日常生活の中で生きつづけました。ところが第２次世界大戦後、薩摩焼は、西洋風の合理化された生活への急激な変化の中で、その位置を失ったかに見えました。きたる21世紀、ものの豊かさだけではなく、心の豊かさを求める時代へ移行しつつあるといわれます。そのような現在、再び、日常生活の中で豊かな歴史と美、そして、誇りを薩摩焼は取り戻すことができると確信するのです。

By the latter part of 19th century, the production of Satsuma wares was in decline mainly due to the loss of patoronage from feudal systems being abolished as imperial rule was being restored. Hard times fell on potters and enamelers threatening their very survival. However, the artistically elaborate White Satsuma was still in great demand in the West, especially Nishikide with its polychrome enamel and gold.

On the other hand, Black Satsuma potters devoted their skills to the production of utilitalian wares.Following WW II , demand for Satsuma ware declined with ever increasing Westernization in everyday life. As we now approach the 21st century, people are seeking a more spritual affluency than that of materialism and hopefully this will restore Satsuma ware to its proud glory, establishing a new era of appreciation in contemporary society.

## ■ 20世紀の薩摩焼の展開

明治時代、鉄道の普及は、物資の流通に革命を起こし、肥前系の安くて、良質の磁器が容易に手に入るようになりました。薩摩焼の各窯は、移入された大量の磁器に圧倒され、特に、廃藩置県で薩摩藩のうしろだてを失った状況の中で、産業の構造変革が迫られていきました。
また、白ものなどは、磁器に圧倒され、国内需要だけではなく海外輸出等の市場開拓も行なわれました。その中にあっても、生活に深くねざした日常雑器を主とした薩摩焼は、第２次世界大戦後の食文化の激変まで生活の中で生きつづけていきますが、一般へのガラス器の普及とともに、それまでとは全く異なった器の文化が形成されました。

The increasing development of railway systems following the Meiji restoration drastically expanded the circulation of goods and commodities throughout Japan. This enabled people to acquire good quality Hizen ceramics and the revitalization of Satsuma kilns was necessary to meet the demand for their wares.
The restructuring of Satsuma kilns was urged in order to meet and seek new market ares since losing their wealthy feudal patronage. White Satsuma kilns sought out new markets in the West, now familiar with this ceramic art form through several international expositions in Europe and America, while the Black Satsuma industry, still deeply rooted in producing utilitarian household items, continued production until after WW II .

44．染付盃台
平佐系　20世紀　（当館蔵）
器高 7.3cm, 口縁部 5.8cm, 胴部 7.6cm

**Sakecup stand, underglaze blue,**
Hirasa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

45．染付盃台
平佐系　20世紀　（当館蔵）
器高 7.0cm, 口縁部 5.5cm, 胴部 7.8cm

**Sakecup stand, underglaze blue,**
Hirasa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

46．ガラス製急須
20世紀　（当館蔵）
器高 11.9cm, 口縁部 4.2cm, 胴部 8.6cm

**Glass tea pot,**20th century.
(JIYUKAN Collection)

47．染付酢入
平佐系　20世紀　（当館蔵）
器高 9.9cm, 口縁部 2.6cm

**Vinegar pot, underglaze blue,**
Hirasa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

48．褐釉摺鉢（かつゆうすりばち）
苗代川系（なえしろがわけい）　20世紀（せいき）　（当館蔵）
器高 12.7cm，口縁部 29.8cm

**Mortar with brown glaze,**
Naeshirogawa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

49．褐釉蒸し器（かつゆうむしき）
苗代川系（なえしろがわけい）　20世紀（せいき）　（当館蔵）
器高 16.7cm，口縁部 29.3cm

**Steamer with brown glaze,**
Naeshirogawa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

50．褐釉甕（かつゆうかめ）
苗代川系（なえしろがわけい）　20世紀（せいき）　（当館蔵）
器高 49.2cm，口縁部 27.2cm，胴部 42.2cm

**Jar with brown glaze,**
Naeshirogawa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

51．焼酎蒸留器（しょうちゅうじょうりゅうき）
苗代川系（なえしろがわ）　20世紀（せいき）　（当館蔵）
器高 23.9cm，口縁部 19.1cm

**Schochu distiller,**
Naeshirogawa Style, 20th century.
(JIYUKAN Collection)

52．染付牡丹文大徳利（そめつけぼたんもんおおとっくり）
肥前系（ひぜんけい）　19世紀後半（せいきこうはん）～20世紀（せいき）
（当館蔵）
器高 33.0cm，口縁部 5.5cm，胴部 21.0cm

**Large bottle, with underglaze cobalt blue,**
Hizen Style, latter 19th to 20th century.
(JIYUKAN Collection)

53．染付牡丹文雲助徳利（そめつけぼたんもんうんすけどっくり）
肥前系（ひぜんけい）　19世紀後半（せいきこうはん）～20世紀（せいき）
（当館蔵）
器高 26.9cm，口縁部 4.6cm，胴部 14.3cm

**Unsuke-dokkuri, bottle with spout, with underglaze cobalt blue,**
Hizen Style, latter 19th to 20th century.
(JIYUKAN Collection)

# 展示解説
## －薩摩焼の展開と特徴－

指宿市教育委員会　下　山　　覚

本企画展は、国際ソロプチミスト指宿の認証10周年を記念し、村田弘之夫妻が収集した薩摩焼等資料253点（ソロプチミストコレクションと呼ぶ）が当博物館に寄贈されたことによる。この資料群は、薩摩焼の歴史を概観する上で、極めて貴重なものであり、卓越したコレクション方針を感じざるを得ない。

本コレクションは、 薩摩焼について見識を培おうとするものにとって、極めて教育的な効果が高い資料でもあり、これら資料を整理し、体系化することで、鹿児島固有の文化である薩摩焼の理解へ大きくつながるものと確信するものである。

このような資料は、一般に、収集において長い時間や人手を通った物であり、考古学的には伝世資料として位置付けられる。従って、その原位置を資料の属性に応じて検討し、個別の資料の履歴を検証していく必要があるともいえる。

したがって、これらの資料を体系化する上で、その資料の持つ差違属性の概略についての検討を行ったが、力不足もあり、一部の資料については、その位置づけを明らかにし得ないものもあった。

展示された資料は、研究の現状を踏まえ、窯ごとの技法など比較的明瞭な特徴を持つものを中心に展示した。中には、大白もののような極めて微妙な、胎土の差違や貫入レベルで見分けることができるようなものもあり[15]、こうしたものは今後、胎土分析などの理化学的方法を行った上での議論が必要であると痛感する。

また、日常雑器類の分類と型式学的検討など残されている課題は多い。

研究の現状を踏まえながら展示資料の概略について触れたい。

本展示の場合、17世紀の資料は、基本的に、貝目の有無をもって判別しているが、貝目の存続期間については、窯の発掘調査等を通じて窯道具の分析、限定をしていく必要がある。つまり、古器を伝統下において製作する際に窯道具も古例に習う場合がある。ここでは、一般的な用例に準じておきたい。山元窯の発掘調査事例では、確かに、擂鉢など日常雑器では、貝目が17世紀後半まで存続していることが確認されている。

1のそば釉四耳壷は、4.と釉の発色が極めて似る。1，4は、茶陶に関連する器と考えられる。表紙および2は、いわゆる山徳利である。徳利の器種区分は、漠然としながらも、苗代川では、非常に安定のよい船徳利[16]，頸部がやや細身の徳利[17]（10）と山徳利[18]（8）の3者に区分した。

今後、窯生産別に、器形などの比較を行い、時期、窯の特性として有意であるか検討することも急務であろう。また、酒類の瓶として利用されたのであれば、内容量によって法量区分が可能であるかもしれない。

現在、用途論を中心に妥当性の高い器種分類しているものに、東京消防庁・新宿四谷三丁目遺跡調査団による発掘調査報告書[19]で分類基準を明瞭に提起したものなどがあるが、薩摩焼の黒ものに見られる地域的な特徴もあり、実情に合った器種分類の検討が望まれる。

3の黒釉双耳尊形花瓶は、苗代川の黒釉の典型であり、類例に枚挙の暇がない。

11の雲助徳利は、基本的には、山徳利、船徳利、徳利にそれぞれ注ぎ口がつくものである。用例については、液体容器とされ、醤油、酒などを入れていたと考えられている。苗代川系の徳利類の底部には、カキトリの不完全なものが多く、指頭痕が残るものがある。

12の尿瓶は、苗代川のものは、口縁部は、胴部に直接穿孔するものである。一方、龍門司の尿瓶（28,29）は、口縁部を筒状に作り出している。また、付け加えれば、つまみの形態は、苗代川系のものは団子状であるが、能野窯の尿瓶は、宝珠形をなしているものがある。施釉状況も、特に28・29の龍門司は、三彩流しのものや玉流しを行うものもあり、日常雑器であるもののその美しさに目を見張る。

種子島の野間窯、能野窯の資料のうち13は塩釉と考えられる。16は野間窯の窯印と考えられる「○」印があり、典型的な一品である。14は双耳の形態が渦巻状であり、一部苗代川系や元立院窯で見られるが、種子島の仏花器の特徴をなすということもできる。

さらに、16などで見られるツマミによる耳の形態は、元立院の資料32,33,34にも見られる。

姶良町教育委員会による元立院窯付近の発掘調査[20]では、窯道具、窯や製品同士が融着した資料が多数発見され、古窯跡の存在の蓋然性の高い資料群であった。この中に、ツマミによる双耳が見られるものが発見されている。

15,16,17は、高尾野窯の特徴である格子目叩が見られ、鈍い光沢のある褐釉が発色する。さらに、15などは巻合せ口を有し、典型的な高尾野窯の特徴を呈する。

平佐系の資料は、18,19の北郷窯の染付からから、20の徳利がある。このころ、21などの長崎磁器である波佐見焼も鹿児島での流通があった。また、輸出用の醤油瓶が生産され（22）、薩摩でも模倣されている。このことが

示すとおり、鹿児島における当該期の染付は、平佐窯だけではなく長崎・肥前磁器と混在していたことが知れる。

龍門司系の資料には、23-30までがあり、特にからからには、「芳林」「芳石」「芳光」などの在銘のものがあり、概ね製作年代は19世紀後半代に限定される。(21)

元立院窯の資料は、明白なものは4点のみであるが、それと疑われる回転糸切底の皿類（灯明皿）がある。

40,41は竪野系と考えられる資料であるが、41については、冷水窯若しくは長田窯の可能性が高いが 苗代川系の御定式窯でも生産されており、今後陶胎の分析、文様による峻別など、多角的に窯固有の特徴を抽出していく必要がある。その他、42の宗胡録写については、本資料の場合、苗代川で生産されたものである可能性が大きいが、竪野系の影響で成立したものとして、竪野系の展示の中で取り扱っている。冷水窯・長田窯のものは、やや暗い発色をなすものが多いことは注意される。

19世紀の日常雑器については、染付などの磁器が大量に生産されるようになると、その区別はきわめて慎重に行う必要がある。特に、天草陶石の利用が行われるようになると、平佐にその材料が移入されると同時に長崎の三川内焼等においても同様に用いられているため、磁胎ではなく、むしろ、絵付、器形による峻別に頼らざるをえない。また、肥前陶工・絵師の招聘が盛んに行われるようになると、成形、絵付け技法も極めて近似する。

平佐窯の場合、主観的に絵付が「素朴」と評価されることも多い。確かに、比較すると、そのように見えないこともない。また、平佐北郷窯と平佐大窯の呉須の発色の差異や絵付けの「ぼやけ」により峻別を唱える場合もあるが、現在のところ明瞭で客観的な指標となり得ていないことも事実であろう。

それを補完する意味で、絵付技法や器形など型式学的などの多くの属性の検討に基く区分、及び体系化も必要である。そのためにも、摸式標本の整備が急務であり、在銘資料の情報蓄積、窯跡の発掘調査が待たれる。

ところで、現在、完形資料として残存するのは、非日常器が多く、薩摩焼日常雑器については美術的な価値が低いと判断され、履歴を伝承することも少なく、少々ぞんざいな扱いであったことは否めない。

しかし、薩摩焼、そして、薩摩焼の生産をめぐるさまざまな歴史の正しい理解のためにも、暮らしの中に息づいてきた日常雑器にも大いに目を向ける必要があることは言うまでもない。

そのような点で、決して華美な薩摩焼ばかりを収集することなく、ひっそりと生活の中に息づいて、人々の暮らしを支えてきた薩摩焼の価値を見出し、その散逸を憂慮し、長年にわたり収集された本コレクションは、極めて高い価値を有するものであるといえよう。

今、日常の中で用いられてきた薩摩焼は、用途を変えて、アンティークとしての価値等が再発見されてきている。しかし、そうした価値付けの前に、本来の機能に基く美しさを見据える審美眼をひととき持ち、薩摩焼が語る歴史に耳を傾ける時間こそが、心の豊かさを象徴しているような気がしてならない。

そのような豊かな時間を再生する機会として、本展示会が有意義なものであってほしいと願うものである。

本図録を作成するにあたり、琉球大学池田栄史氏には、琉球と種子島能野窯との関わりについて貴重なご助言を賜った。また、本図録の概説部分、及び薩摩焼の鑑定に薩摩焼研究家野元堅一郎氏に多大なご教示を賜った。九州陶磁資料館大橋康二氏には、世界の炎博の会期中の多忙な時期にも関わらず肥前系の資料の鑑定に応じてくださったこと深く感謝申し上げます。下山久美子氏には、薩摩焼全般にわたり日々の会話の中で有益なご教示を賜り、寄贈資料の一覧表の作製の便をはかっていただいた。さらに、図版作製・写真撮影において中摩浩太郎、渡部徹也、鎌田洋昭、別府大学学生上高原聡氏らのご協力を得た。加えて、村田雪枝氏には、本図録の全体の英訳をしていただいた。英訳校正では、古伊万里コレクターとして著名なニューヨーク在住のDr. STEPHEN LEVINE夫妻の多大なご協力を得た。

そして、元立院窯の発掘調査成果については、姶良町教育委員会下鶴 弘氏のご教示と出土品の実見の機会及び資料借用の便をはかって頂いた。加えて、山元窯の資料・写真借用・本図録の査読にあたっては、加治木町、加治木町教育委員会関 一之氏のご協力を頂いた。

さらに、中扉等の大正期と考えられるガラス乾板写真使用について上川路直光氏の快諾を頂いた。

記して感謝申し上げます。

その他、下記機関のお世話を頂いた。この場を借りて感謝申し上げます。

鹿児島県教育委員会文化課・鹿児島県埋蔵文化財センター・鹿児島県歴史資料センター黎明館・加治木町郷土館・
加治木町龍門司焼企業組合・加治木町教育委員会・姶良町歴史民俗資料館・姶良町教育委員会・苗代川民陶館・
財団法人長島美術館 （順不同）

＜註及び参考・引用文献＞

（１）貝目のある薩摩焼は一般に17世紀代と考えられているが、この頃の初期薩摩焼でも特に、苗代川系窯（元屋敷窯、堂平窯等）、及び山元窯とにおいて使用例が確認されているに留まる。微量ではあるが、最近も古器の技術伝承のため二枚貝等を窯道具として使用していたとも聞くが、微量の生産であると聞く。従って、その可能性も考慮しつつ、17世紀代という年代観を用いるべきであろう。
（２）1985　野元堅一郎　鹿児島県歴史資料センター黎明館特別企画展「さつまやき展・展示図録」
（３）「尊」については、中国の古代銅器で、酒器である「尊」に似ることから呼ばれる名称で、この形態の壷については中国磁器の中で伝統的に製作されていたと考えられる。李朝代の韓国でも「尊」に近い器形の磁器が生産されていた。しかし、薩摩焼の「尊」形花瓶については、直接中国磁器との関りを論ずることはできない。また、用途からは、むしろ仏具の可能性もある。
（４）（2）に同じ
（５）1941　田澤金吾・小山富士夫　「薩摩焼の研究」
（６）1995　鹿児島県姶良郡加治木町教育委員会　「山元古窯跡」
（７）（2）に同じ
（８）（2）に同じ
（９）池田栄史氏のご教示による。
（10）野元堅一郎氏の能野窯の３時期区分による。
（11）（2）に同じ
（12）（2）に同じ
（13）模式図は渡部徹也氏による。
（14）宋胡録写の竪野、苗代川の区別については極めて微妙であり、素地の釉発色（竪野系は一般に暗く、苗代川系は黄白色を呈する）の差違、若しくは、絵付技法（竪野系は一般にシャープな幾何学文を用いるが、苗代川系は、太い線で粗雑な筆致である）等の差違が看守されるが、決定的な判別方法とは現在のところ言いがたい。
（15）太白ものについては、竪野、苗代川両系ともに判じがたい資料が多い。一般には、貫入の入りかたや、素地の土の差違からの発色状況の差違などが言われる。
（16）船徳利の呼称は、現代陶工が用いる名称、形態差に基づき器種区分したことに基づく。実際の使用法が、船上で使うものであるかは定かではない。
（17）徳利については、広義に、山徳利、船徳利、徳利、雲助徳利を含む場合と、狭義の徳利があるが、ここでは、狭義の徳利を指す。
（18）山徳利については、船徳利と比較して、底部が胴部最大径よりも小さいもので、口縁部を二重口縁状の形態に作り出す。これも用例伝承としては、山仕事の時に持ちやすい形態をしているとされているが、持ち運びに適さないと判断できる程度の大きさのものもあり判然としない。口縁部形態について、若干の所見を述べれば、口縁部の直立部分について、貝目などがつく古い作品と考えられるものは、直立に近い形態をなし、新しいものほど外側に向かって開く傾向や頚部のくびれの状況が、古いものは明瞭であるのに対し、新しいと考えられるものは緩慢になるという型式組列も検討できるかもしれない。今後の苗代川系の徳利類の型式学的検討が望まれる。
（19）1991　東京消防庁・新宿区四谷三丁目橋牟礼川遺跡調査団『別冊江戸遺跡検出のやきもの分類』「四谷三丁目遺跡」
（20）1995　鹿児島県姶良郡姶良町教育委員会「元立院窯跡」
（21）芳林・芳石・芳光 は概ね19世紀後半期に作陶。

※　なお本書の執筆・編集・レイアウト・写真撮影・版下作成は下山覚がこれを行った。誤った引用・誤解については、すべて筆者の責に帰するものである。

# 附編　国際ソロプチミスト指宿寄贈資料一覧

**Appendix: List of Soroptimist Donation**

| | 名称 | 型式 | 年代 | 法量（高さ） | 法量（口縁部） | 法量（胴部） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 染付角からから | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.0 | 3.0 | 11.8 |
| 2 | 青白磁燭台 | 平佐？ | | 16.9 | 8.7 | 21.1 |
| 3 | 染付牡丹文徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 21.8 | 3.5 | 12.3 |
| 4 | 染付笹文徳利 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.7 | 3.7 | 12.3 |
| 5 | 染付土瓶 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 9.4 | 5.4 | 12.6 |
| 6 | 染付草花文からから | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.0 | 3.1 | 11.5 |
| 7 | 染付角からから | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.5 | 3.6 | 11.5 |
| 8 | 染付角からから | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.2 | 2.9 | 11.9 |
| 9 | 青白磁角からから | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.5 | 3.3 | 11.2 |
| 10 | 青白磁双耳尊形花瓶 | 平佐？ | | 24.5 | 13.2 | 10.5 |
| 11 | 染付菊文徳利 | 平佐 | 19Ｃ | 24.8 | － | 17.5 |
| 12 | 染付徳利 | 平佐　北郷窯？ | 19Ｃ前半～20Ｃ前半 | 27.0 | 4.3 | 16.0 |
| 13 | 白磁徳利 | 平佐？ | | 20.8 | 3.8 | 12.2 |
| 14 | 染付徳利 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.1 | 3.5 | 13.5 |
| 15 | 染付笹文徳利 | 波佐見 | 19Ｃ | 21.3 | 3.3 | 12.6 |
| 16 | 染付徳利 | 平佐　北郷窯 | 19Ｃ前半 | 26.5 | 4.1 | 16.3 |
| 17 | 染付徳利 | 平佐　北郷窯？ | 19Ｃ前半～20Ｃ前半 | 21.5 | 3.5 | 13.3 |
| 18 | 染付徳利 | 波佐見 | 18Ｃ後半 | 28.2 | 4.7 | 14.7 |
| 19 | 染付牡丹文大徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 33.0 | 4.9 | 18.8 |
| 20 | 染付牡丹文徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 23.2 | 3.8 | 13.0 |
| 21 | 染付牡丹文徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 21.3 | 3.3 | 12.6 |
| 22 | 染付牡丹文徳利 | 不明 | | 22.7 | 3.7 | 13.3 |
| 23 | 白磁徳利 | 平佐？ | | 19.7 | 2.9 | 11.2 |
| 24 | 白磁徳利 | 平佐？ | | 18.2 | 3.1 | 11.6 |
| 25 | 白磁徳利 | 平佐？ | | 21.0 | 4.0 | 12.0 |
| 26 | 染付松文花生 | 平佐？ | | 18.0 | 4.4 | 9.3 |
| 27 | 染付牡丹文大徳利 | 肥前系 | 19Ｃ後半～20Ｃ | 33.0 | 5.5 | 21.0 |
| 28 | 染付角徳利 | 平佐？ | | 23.0 | 5.2 | 14.5 |
| 29 | 染付菊文花瓶 | 苗代川 | 20Ｃ前半 | 18.2 | 10.2 | 7.0 |
| 30 | 染付牡丹文徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 22.0 | 3.7 | 12.7 |
| 31 | 白磁花瓶 | 不明 | | 18.2 | 5.3 | 10.5 |
| 32 | 染付徳利 | 平佐？ | | 22.5 | 3.2 | 13.5 |
| 33 | 染付牡丹文大徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 34.0 | 5.3 | 20.1 |
| 34 | 染付荒磯文徳利 | 不明 | | 23.2 | 3.7 | 16.0 |
| 35 | 染付徳利 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.6 | 3.3 | 14.0 |
| 36 | 染付牡丹文徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 23.0 | 3.6 | 13.4 |
| 37 | 染付牡丹文大徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 37.5 | 6.0 | 21.5 |
| 38 | 染付牡丹文徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 21.9 | 4.0 | 12.7 |
| 39 | 染付牡丹文大徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 34.2 | 5.0 | 20.1 |
| 40 | 染付牡丹文大徳利 | 有田 | 20Ｃ前半 | 33.0 | 5.3 | 19.0 |
| 41 | 染付徳利 | 不明 | | 25.5 | 4.3 | 15.7 |
| 42 | 透明釉玉流尿瓶 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 23.0 | 7.2 | 20.8 |
| 43 | 褐釉玉流尿瓶 | 龍門司 | 19Ｃ～20Ｃ | 17.0 | 6.4 | 17.5 |
| 44 | 褐釉尿瓶 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 17.8 | 4.1 | 18.8 |
| 45 | 褐釉白流尿瓶 | 龍門司 | 19Ｃ～20Ｃ | 15.0 | 5.7 | 16.7 |
| 46 | 掛分け釉尿瓶 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 16.3 | 6.7 | 17.6 |
| 47 | 土灰釉尿瓶 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 15.2 | 6.8 | 17.2 |
| 48 | 褐釉尿瓶 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 17.9 | 4.3 | 18.1 |
| 49 | 透明釉白泥流し大からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.2 | 7.0 | 16.8 |
| 50 | 双耳仏花器 | 不明 | | 13.5 | － | 9.2 |
| 51 | 褐釉からから | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 11.4 | 3.4 | 12.4 |
| 52 | 黒釉釘掻文徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 20.7 | 5.4 | 16.0 |
| 53 | 飴釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 18.9 | 5.8 | 15.7 |
| 54 | 白磁徳利 | 平佐？ | | 18.5 | 3.6 | 10.2 |
| 55 | 白薩摩太白徳利 | 竪野窯 | 18Ｃ | 23.5 | 6.4 | 16.3 |
| 56 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 23.5 | 6.4 | 16.3 |
| 57 | 褐釉尿瓶 | 苗代川 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 18.6 | 4.8 | 19.2 |
| 58 | 黒釉双耳尊形花瓶 | 苗代川 | 17Ｃ | 27.3 | 21.3 | 13.6 |
| 59 | 褐釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 23.1 | 5.8 | 16.9 |
| 60 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 29.2 | 9.0 | 23.2 |
| 61 | 褐釉徳利 | 高尾野窯 | 18Ｃ | 24.5 | 6.7 | 19.7 |
| 62 | 宋胡録写双耳花瓶 | 苗代川 | 18Ｃ～19Ｃ | 27.5 | － | 18.5 |
| 63 | 蕎麦釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.4 | 5.6 | 17.2 |

| | 名称 | 型式 | 年代 | 法量（高さ） | 法量（口縁部） | 法量（胴部） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 64 | 黒釉釘掻文徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 20.3 | 5.9 | 16.6 |
| 65 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 23.9 | 5.6 | 18.0 |
| 66 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 25.7 | 9.7 | 20.5 |
| 67 | 褐釉鶴首徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.1 | 4.5 | 14.7 |
| 68 | 黒釉蒸し器 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 36.3 | 30.3 | 35.0 |
| 69 | 褐釉甕 | 高尾野？ | | 27.8 | 15.6 | 20.7 |
| 70 | 焼酎蒸留器 | 苗代川 | 20Ｃ | 23.9 | 19.1 | 29.4 |
| 71 | 褐釉三耳大壺 | 琉球（壷屋） | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 66.8 | 15.6 | 38.4 |
| 72 | 焼締壺 | 不明 | | 38.4 | 11.6 | 28.4 |
| 73 | 褐釉三耳大壺 | 不明 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 52.1 | 12.8 | 28.5 |
| 74 | 褐釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.0 | 9.3 | － |
| 75 | 褐釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 1.9 | 10.1 | － |
| 76 | 褐釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.4 | 9.8 | － |
| 77 | 褐釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 1.8 | 10.3 | － |
| 78 | 染付蓋 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.8 | 9.6 | － |
| 79 | 染付蓋 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.9 | 9.6 | － |
| 80 | 染付蓋 | 平佐 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.8 | 9.6 | － |
| 81 | 掛け分け釉小皿 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.4 | 5.3 | － |
| 82 | 土灰釉小皿 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 1.8 | 5.8 | － |
| 83 | 褐釉小皿 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.1 | 5.8 | － |
| 84 | 褐釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.9 | 8.3 | － |
| 85 | 掛け分け釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 3.4 | 7.9 | － |
| 86 | 掛け分け釉盃 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 2.4 | 7.6 | － |
| 87 | 染付菊文皿 | 伊万里 | 18Ｃ～19Ｃ前半 | 2.5 | 22.5 | － |
| 88 | 染付山水文皿 | 伊万里 | 18Ｃ～19Ｃ前半 | 4.3 | 22.1 | － |
| 89 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 20.4 | 5.5 | 15.4 |
| 90 | 透明釉白象嵌三島手花瓶 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.2 | ― | 22.9 |
| 91 | 黒釉蓋付壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.4 | 11.1 | 14.4 |
| 92 | 蕎麦釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.8 | 6.9 | 19.8 |
| 93 | 蕎麦釉山徳利 | 苗代川 | 17Ｃ | 27.6 | 8.4 | 21.2 |
| 94 | 塩釉壺 | 熊野窯 | 19Ｃ | 25.7 | 12.8 | 21.9 |
| 95 | 蕎麦釉壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 33.7 | 17.0 | 24.4 |
| 96 | 黒釉花瓶 | 不明 | | 18.5 | 6.1 | 18.1 |
| 97 | 蕎麦釉壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 25.4 | 7.8 | 19.4 |
| 98 | 褐釉蓋付壺 | 苗代川？ | | 33.6 | 14.7 | 24.0 |
| 99 | 蕎麦釉釘掻波状文変形徳利 | 苗代川 | | 22.8 | 4.1 | 16.1 |
| 100 | 焼締徳利 | 種子島複元 | 19Ｃ | 30.9 | 6.9 | 18.5 |
| 101 | 焼締壺 | 不明 | | 38.0 | 15.6 | 26.2 |
| 102 | 褐釉壷 | 高尾野窯 | 20Ｃ | 24.9 | 15.8 | 22.8 |
| 103 | 褐釉釘掻波状沈線文半胴 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 27.9 | 16.7 | 23.0 |
| 104 | 蕎麦釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 28.0 | 10.1 | 21.7 |
| 105 | 褐釉釘掻文徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.7 | 5.2 | 16.5 |
| 106 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 26.5 | 6.8 | 20.1 |
| 107 | 褐釉蓋付壺 | 苗代川？ | | 32.7 | 16.1 | 25.5 |
| 108 | 蕎麦釉壺 | インドシナ | 17Ｃ | 38.8 | 11.9 | 32.2 |
| 109 | 蕎麦釉壺 | インドシナ | 17Ｃ | 38.5 | 12.2 | 31.6 |
| 110 | 褐釉壺 | インドシナ？ | | 4.3 | 11.2 | 34.1 |
| 111 | 褐釉壺 | インドシナ | 17Ｃ | 31.2 | 10.6 | 25.4 |
| 112 | 褐釉壺 | 苗代川？ | | 25.8 | 10.8 | 22.3 |
| 113 | 褐釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 38.2 | 11.4 | 29.7 |
| 114 | 褐釉雲助徳利 | 高尾野 | 19Ｃ後半 | 28.9 | 13.0 | 27.8 |
| 115 | 褐釉徳利 | 苗代川 | 17Ｃ後半 | 29.2 | 11.2 | 24.0 |
| 116 | 褐釉徳利 | 苗代川 | 17Ｃ～18Ｃ | 23.1 | 4.7 | 17.4 |
| 117 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.4 | 7.7 | 18.7 |
| 118 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.0 | 5.7 | 15.5 |
| 119 | 褐釉雲助徳利 | 高尾野 | 19Ｃ後半 | 34.4 | 13.9 | 28.1 |
| 120 | 褐釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.1 | 5.4 | 16.5 |
| 121 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 26.7 | 6.4 | 20.7 |
| 122 | 褐釉鶴首花瓶 | 苗代川？ | | 24.1 | 5.8 | 12.1 |
| 123 | 黒釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ～19Ｃ | 24.4 | 8.0 | 19.2 |
| 124 | 掛け分け釉大からから | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 19.3 | 4.5 | 15.3 |
| 125 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 26.4 | 6.1 | 18.4 |
| 126 | 黒釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.5 | 5.7 | 15.5 |
| 127 | 黒釉蓋付壺 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 15.0 | 11.4 | 18.3 |
| 128 | 黒釉蓋 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | － | － | 12.2 |
| 129 | 黒釉広口壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 17.1 | 11.6 | 14.4 |
| 130 | 褐釉雲助徳利 | 高尾野窯 | 18Ｃ | 20.3 | 7.1 | 19.1 |
| 131 | 黒釉大からから | 苗代川 | 19Ｃ～20Ｃ | 18.3 | 5.5 | 16.7 |
| 132 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 29.7 | 10.4 | 24.7 |
| 133 | 蕎麦釉山徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 25.4 | 6.1 | 19.1 |
| 134 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.2 | 5.4 | 16.1 |
| 135 | 掛け分け釉大からから | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 18.6 | 4.8 | 14.5 |
| 136 | 焼締網代文徳利 | 琉球 | | 14.3 | 5.1 | 10.6 |
| 137 | 焼締徳利 | 種子島複元 | | 28.7 | 8.7 | 19.5 |
| 138 | 褐釉白泥文大徳利 | 丹波 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 31.1 | 5.7 | 18.9 |
| 139 | 黒釉徳利 | 苗代川？ | | 26.2 | 6.3 | 20.0 |
| 140 | 褐釉アンダガミ | 琉球 | | 15.9 | 9.2 | 13.4 |
| 141 | 掛け分け釉大からから | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 18.0 | 5.6 | 16.2 |
| 142 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.5 | 4.8 | 15.7 |
| 143 | 黒釉蓋付壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.7 | 8.4 | 13.2 |
| 144 | 飴釉徳利 | 不明 | | 27.7 | 5.2 | 16.2 |
| 145 | 黒釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 27.0 | 7.0 | 19.5 |
| 146 | 蕎麦釉山徳利 | 苗代川 | 18Ｃ～19Ｃ | 29.2 | 11.2 | 24.0 |

| | 名称 | 型式 | 年代 | 法量（高さ） | 法量（口縁部） | 法量（胴部） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 147 | 蕎麦釉徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.4 | 9.7 | 22.1 |
| 148 | 焼締徳利 | 種子島複元 | 19Ｃ | 24.8 | 5.2 | 12.0 |
| 149 | 焼締徳利 | 種子島複元 | 19Ｃ | 28.4 | 6.9 | 14.8 |
| 150 | 焼締徳利 | 種子島複元 | 19Ｃ | 29.1 | 7.1 | 15.6 |
| 151 | 蕎麦釉山徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 25.1 | 5.7 | 17.0 |
| 152 | 蕎麦釉四耳壺 | 苗代川 | 17Ｃ | 18.7 | 11.1 | 20.8 |
| 153 | 飴釉黒流アンダガミ | 琉球 | | 21.2 | 10.8 | 17.8 |
| 154 | 褐釉山徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 25.2 | 6.3 | 19.0 |
| 155 | 焼締徳利 | 種子島複元 | | 34.2 | 8.6 | 22.4 |
| 156 | 褐釉獅子耳尊形花瓶 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 27.1 | 21.2 | 13.6 |
| 157 | 焼締徳利 | 種子島複元 | | 30.0 | 9.0 | 20.1 |
| 158 | 蕎麦釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 20.0 | 6.2 | 16.7 |
| 159 | 褐釉摺鉢 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.7 | 29.8 | － |
| 160 | 蕎麦釉広口壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 19.6 | 18.3 | 24.0 |
| 161 | 褐釉蓋物 | 不明 | | 11.2 | 14.2 | 19.7 |
| 162 | 褐釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 19.1 | 5.5 | 16.3 |
| 163 | 褐釉釘掻文徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.8 | 5.3 | 15.9 |
| 164 | 褐釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 20.7 | 5.8 | 15.5 |
| 165 | 褐釉壺 | 高尾野?・能野? | | 23.9 | 14.8 | 23.9 |
| 166 | 褐釉三耳茶壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.3 | 9.9 | 22.2 |
| 167 | 蕎麦釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.8 | 6.3 | 16.3 |
| 168 | 蕎麦釉蓋付壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.4 | 19.9 | 25.8 |
| 169 | 黒釉壺 | 龍門司？ | | 16.1 | 12.0 | 18.6 |
| 170 | 蕎麦釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 22.2 | 5.8 | 16.0 |
| 171 | 黒釉筒形蛸壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 24.9 | 13.1 | 15.9 |
| 172 | 褐釉蓋 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | － | － | 11.4 |
| 173 | 蕎麦釉筒形花瓶 | 苗代川 | 17Ｃ | 21.4 | 10.4 | － |
| 174 | 褐釉蓋付壺 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 17.3 | 16.8 | 23.3 |
| 175 | 蕎麦釉蓋 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | － | － | 7.7 |
| 176 | 黒釉茶家 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 9.0 | 7.5 | 16.8 |
| 177 | 褐釉蒸し器 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.5 | 31.2 | － |
| 178 | 褐釉蒸し器 | 苗代川 | 20Ｃ | 16.7 | 29.3 | － |
| 179 | 褐釉蒸し器 | 苗代川 | 20Ｃ | 25.3 | 31.8 | 37.7 |
| 180 | 褐釉三耳大壺 | 種子島複元 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 65.8 | 18.2 | 46.0 |
| 181 | 褐釉三耳大壺 | 琉球（壷屋） | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 60.0 | 17.5 | 37.8 |
| 182 | 蕎麦釉四耳大壺 | 苗代川 | 19Ｃ | 60.3 | 19.7 | 42.4 |
| 183 | 褐釉甕 | 苗代川 | 20Ｃ | 49.2 | 27.2 | 42.2 |
| 184 | 褐釉三耳大壺 | 琉球（壷屋） | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 61.8 | 17.5 | 36.8 |
| 185 | 褐釉大甕 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 71.2 | 36.8 | 54.0 |
| 186 | 褐釉三耳大壺 | 琉球（壷屋） | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 69.8 | 16.2 | 58.0 |
| 187 | 黒釉双耳仏花器 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 17.4 | 4.8 | 11.3 |
| 188 | 蕎麦釉双耳仏花器 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 14.1 | 6.1 | 10.9 |
| 189 | 黒釉双耳仏花器 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 14.6 | 5.5 | 11.8 |
| 190 | 褐釉双耳仏花器 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.6 | 5.5 | 10.9 |
| 191 | 飴釉雲助徳利 | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 21.4 | 5.1 | 14.3 |
| 192 | 褐釉醤油差し | 苗代川 | 18Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.0 | 4.2 | 10.8 |
| 193 | 黒釉双耳仏花器 | 不明 | | 13.9 | 6.0 | 7.8 |
| 194 | 褐釉双耳仏花器 | 元立院 | 17Ｃ後半～18Ｃ前半 | 13.6 | 6.0 | 9.3 |
| 195 | 褐釉双耳仏花器 | 元立院 | 17Ｃ後半～18Ｃ前半 | 9.6 | 4.4 | 4.9 |
| 196 | 褐釉双耳仏花器 | 元立院 | 17Ｃ後半～18Ｃ前半 | 9.5 | 4.5 | － |
| 197 | 土灰釉徳利 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 19.1 | 3.2 | 11.1 |
| 198 | 黒釉徳利 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 15.4 | 2.6 | 11.5 |
| 199 | 土灰釉白流し徳利 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 18.6 | 3.2 | 12.6 |
| 200 | 黒釉花瓶 | 元立院 | 18Ｃ後半～19Ｃ前半 | 14.7 | 8.1 | 7.3 |
| 201 | 白化粧油壺 | 龍門司 | 19Ｃ～20Ｃ | 10.7 | 2.4 | 8.1 |
| 202 | 二彩釉油壺 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 10.2 | 2.3 | 7.5 |
| 203 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 14.3 | 4.2 | 12.0 |
| 204 | 透明釉白流からから | 龍門司 | 19Ｃ | 14.2 | 4.7 | 12.8 |
| 205 | 褐釉青流からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.0 | 4.6 | 12.5 |
| 206 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.8 | 4.8 | 12.7 |
| 207 | 白化粧鉄絵笹文からから | 苗代川 | 19Ｃ | 18.3 | 5.5 | 12.2 |
| 208 | 二彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.1 | 4.9 | 12.1 |
| 209 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 12.9 | 4.8 | 11.7 |
| 210 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.2 | 4.1 | 11.8 |
| 211 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.2 | 4.6 | 12.2 |
| 212 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ | 13.5 | 4.3 | 9.9 |
| 213 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.4 | 4.8 | 12.3 |
| 214 | 白化粧青流からから | 龍門司 | 19Ｃ | 13.3 | 5.1 | 10.3 |
| 215 | 二彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 14.5 | 4.5 | 13.0 |
| 216 | 三彩釉からから | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 13.2 | 4.6 | 12.5 |
| 217 | 白化粧双耳仏花器 | 龍門司 | 19Ｃ後半～20Ｃ前半 | 15.0 | 8.3 | 8.4 |
| 218 | 青磁双耳花瓶 | 伊万里 | 18Ｃ～19Ｃ前半 | 14.8 | 8.0 | 8.0 |
| 219 | ガラス製急須 | 不明 | 20Ｃ | 11.9 | 4.2 | 8.6 |
| 220 | 白薩摩太白土瓶 | 竪野窯 | 19Ｃ | 18.8 | 6.0 | 11.4 |
| 221 | 褐釉壺 | 種子島復元 | | 14.3 | 7.4 | 13.8 |
| 222 | 三彩釉茶家 | 琉球（壷屋） | | 15.2 | 5.3 | 12.8 |
| 223 | 飛鉋茶家 | 琉球（壷屋） | | 15.5 | 6.2 | 14.6 |
| 224 | 褐釉からから | 琉球 | | 10.6 | 4.4 | 11.7 |
| 225 | 焼締徳利 | 琉球 | | 22.5 | 6.0 | 11.5 |
| 226 | 三彩釉茶家 | 琉球（壷屋） | | 14.9 | 4.5 | 12.9 |
| 227 | 三彩釉茶家 | 琉球（壷屋） | | 17.9 | 6.0 | 15.8 |
| 228 | 焼締長頸壺 | 琉球 | | 16.7 | 8.2 | 10.3 |
| 229 | 白化粧掻落花文瓶子 | 琉球複製 | | 19.9 | 3.9 | 9.9 |
| 230 | 染付牡丹文雲助徳利 | 肥前系 | 19Ｃ後半～20Ｃ | 26.9 | 4.6 | 14.3 |

| | 名称 | 型式 | 年代 | 法量（高さ） | 法量（口縁部） | 法量（胴部） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 231 | 染付盃台 | 平佐 | 20 C | 7.3 | 5.8 | 7.6 |
| 232 | 染付盃台 | 平佐 | 20 C | 7.0 | 5.5 | 7.8 |
| 233 | 白磁盃 | 不明 | | 3.3 | 3.8 | − |
| 234 | 白磁印花文盃 | 不明 | | 2.9 | 3.5 | − |
| 235 | 青白磁土瓶 | 平佐 | 19 C後半～20 C前半 | 14.3 | 5.4 | 12.7 |
| 236 | 白磁徳利 | 平佐 | 19 C後半～20 C前半 | 20.6 | 2.9 | 11.9 |
| 237 | 白磁徳利 | 平佐？ | | 19.6 | 3.3 | 11.2 |
| 238 | 染付草花文角からから | 平佐 | 19 C | 11.8 | 3.1 | 12.4 |
| 239 | 染付草花文角からから | 平佐 | 19 C | 12.2 | 3.2 | 10.9 |
| 240 | 青白磁からから | 平佐 | 19 C後半～20 C前半 | 11.3 | 3.2 | 11.2 |
| 241 | 染付草花文からから | 平佐 | 19 C後半～20 C前半 | 12.3 | 3.5 | 12.8 |
| 242 | 染付酢入 | 平佐 | 20 C | 9.9 | 2.6 | 9.3 |
| 243 | 染付草花文仏花器 | 平佐？ | | 16.3 | 5.7 | 7.8 |
| 244 | 染付洋字文醤油瓶 | 波佐見 | 19 C前半 | 17.7 | 3.0 | 10.3 |
| 245 | 染付牡丹文徳利 | 不明 | | 25.5 | 3.4 | 15.6 |
| 246 | 褐釉花瓶 | 野間 | 19 C | 15.3 | 8.6 | 9.7 |
| 247 | 染付八角鉢 | 平佐 | 19 C～20 C | 8.2 | 19.4 | − |
| 248 | 染付山水図輪花皿 | 肥前系 | 18 C末～19 C前半 | 4.0 | 20.5 | − |
| 249 | 染付草花文皿 | 肥前系 | 18 C後半 | 3.4 | 20.2 | − |
| 250 | 染付花鳥文水盤 | 肥前系 | 19 C後半 | 6.4 | 23.7 | − |
| 251 | 染付牡丹文大徳利 | 肥前系 | 19 C後半～20 C前半 | 40.2 | 5.5 | 24.30 |
| 252 | 蕎麦釉雲助徳利 | 苗代川 | 18 C後半～20 C前半 | 39.5 | 13.9 | 32.8 |
| 253 | 黒釉花瓶 | 元立院 | 18 C後半～19 C前半 | 14.7 | 8.1 | 7.3 |

※法量については、単位cmとする。

＜裏表紙資料＞

## 染付八角鉢

平佐系　19～20世紀　（当館蔵）

器高 8.2cm, 口縁部 18.3cm

約400年の歴史とともに、薩摩焼は独自の文化を形作ってきました。この鉢の絵付のようにおおらかで、暖かみがあり、丸みを帯びた世界はわたしたちを和やかにしてくれるようです。

**Octagonal bowl with painted decoration.**
**Underglazed blue,**
Hirasa, 19th to 20th century,
(JIYUKAN Collection).
Satsuma ware has established a unique culture during its 400 year history. The carefree way of enameling in this bowl has an appealing beauty of warmth and tranquility.


指宿市考古博物館
時遊館 COCCO はしむれ

平成８年度企画展示図録
暮らしの中の薩摩焼展

発行日 ―― 1996 年 10 月 1 日
発行 ―― 指宿市教育委員会
国際ソロプチミスト指宿
住所 ―― 〒891-04　鹿児島県指宿市十二町　2290
印刷 ―― （株）トライ社

DATE ―― October 1.1996
PUBLISHED BY ―― Board of Education, Ibusuki City
Soroptimist International of Ibusuki
ADDRESS ―― 〒891-04　2290 Junicho,Ibusuki-city,Kagoshima Pref.
PRINTED BY ―― TORAISHA Co.,LTD.

# Satsuma Ware in Everyday Life

The Archaeological Museum of Ibusuki City
**JIYUKAN COCCO HASHIMURE**

Special Exhibition, October 1 to 31,1996

■Ibusuki City, Ibusuki City Board of Education
■Soroptimist International Ibusuki